

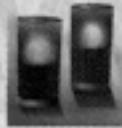
作曲家 林 光

京都に住むマリリンバ奏者の通崎睦美と、
亀有駅前のホールでデュオコンサート。
知り合ってからまだ十年にはならない、ぼく
よりはるかに若い仕事仲間。マリリンバとは
姉妹楽器の木琴の草分けの名手、故・平岡
養一さん愛用の楽器を、縁あって譲り受け
た通崎のために、「木琴協奏曲（夏の雲走
る）」を作曲したのが去年のこと。

あまた存在するこのクニの輝かしい「女
流」マリリンバ奏者のなかで、「凄いの」が
迫ってこない芸風の睦美さんと、なんとな
くウマが合うことから、折にふれてパート
ナーをつとめるようになった。

定番のひとつは、バッハの二声のインベ
ンションを、ピアノの両手とマリリンバの、
都合三声のインベンションにしてみました

あすへの
話題



編曲集。いずれ全曲を出
版しようよなんて言い交
わしている。

プログラムの後半は、
平岡養一さんのレパート
リーをもらった、大正か
ら昭和の初期にかけて、このクニの都市市
民層が好んで聴いた名曲集。

「アマリリス」「踊る人形」「ホラ・ス
タッカート」、名バイオリニストのクライ
スラーによる「贖作・ペートル・ヴェンの小
ロンド」そして「金婚式」。

そうだ、「金婚式」は、ほくも少年時代、
鷺見三郎先生の不肖のバイオリン生徒だっ
たころ弾かされたっけ。

結婚五十周年、めでたいはずの祝いの曲
が、なんでこんなに寂しく悲しい音楽なの
かと、そのころの感想はいまも変わらない。
ふたり暮らしのほくたちにもまもなくや
ってくるその日を迎える音楽にしては…
…。

と、どこからか声あり。自分でつくりや
あいいノ。そっか、その手があったか。

キンコンカンと鳴り響け